

スペイン語圏を知る本（その56）

杉山茂樹著 『バルサ対マンU 「世界最高の一戦」を読み解く』

（光文社新書、2010年）

評者 安田 圭史

スペインサッカーの1部リーグ、リーガ・エスパニョーラ2連覇中のFCバルセロナ（以下バルサ）は、昨年2008～2009年シーズンには、イングランドのマンチェスター・ユナイテッド（以下マンU）に勝利し、ヨーロッパの各国リーグの有力チームが競うヨーロッパチャンピオンズリーグ（以下チャンピオンズリーグ）も制覇した。本書の著者、杉山茂樹氏は両者の試合を「世界最高の一戦」と定義し、真の世界最強を決する戦いであったと回顧する。実際マンUは、2007～2008年シーズンにチャンピオンズリーグを制し、一方バルサは、2005～2006年の同リーグ覇者であった。

著者は、「最強」と目される両チームがチャンピオンズリーグ決勝に進んだことについて、2003～2004年シーズンに準決勝まで勝ちあがったスペイン・ガリシア地方のチーム、デポルティーボ・ラ・コルーニャ（以下デポルティーボ）を例示し、「番狂わせ」が激減した状態と表現している（47頁）。このチームは、同じスペインのレアル・マドリードやバルサと比べ、資金面で大きく劣り、スペインでは長年有力なクラブとはみなされていなかった。しかし、90年代後半から優勝も含め、国内リーグの上位に常に名を連ねるようになっていた。著者は、その成功の要因をチームの卓越したスカウティング能力であるとしている（47頁）。特に、契約金のさほど高くない有能なブラジル人選手を数多く発掘し、「強い」チームを作り上げたという。このようなチームが最近良い成績を上げられなくなったのは、バルサに代表されるヨーロッパの有力クラブが、弱小クラブのスカウティング技術を手本とし、多くのブラジル人選手やアフリカ系選手と契約するようになったからである。

一方で杉山氏は、「番狂わせ」が少なくなる過程で、失われていくのが各国リーグの「お国柄」であると強調している（213～215頁）。それは1996年、EU加盟国の国籍を持つサッカー選手に対して、ヨーロッパの各国リーグに自由に移

籍できる権利を認めるボスマン判決の内容が適用され始めたことに起因している。これにより、EU加盟国出身の選手のみならず、ヨーロッパ諸国を旧宗主国とする国々の選手の大半も、ヨーロッパの各国リーグで設けられている「外国人枠」に入ることがなくなったのである。資金面でゆとりのあるクラブは、「外国人」とみなされない「外国人選手」を多数補強し始め、国際色豊かなかつ強力なチームに進化していった。デポルティーボをはじめとするクラブが目立った成績を上げられず、バルサやマンUのようなチームが常に各国リーグやチャンピオンズリーグで上位を独占するようになったのは、このような事情も関係していたのである。

さらに著者は、こうした国を超えた交流が深まることで、各国のサッカーのカラーが均一化に向かっていると論じている（214～215頁）。つまり、様々な国籍の選手がヨーロッパの各国リーグに所属し、選手がそこで培った技術や経験を自国の代表チームに伝えることで、多くの代表チームで以前存在した特有のスタイルが失われ、より均質化したサッカーが展開されるようになったということである。杉山氏は代表チームが、クラブチームと異なり強化に割かれる日数が少ない分、ワールドカップは、チャンピオンズリーグに比べて「緩い」大会であると断言している（277頁）。そうした側面を踏まえると、今や後者が世界最高峰の技術や戦術を競う戦いであると考えてよい。そしてその頂点に立ったバルサが本書のタイトル通り、「世界最高」のチームであることに疑いはない。ちなみに今年南アフリカワールドカップで初優勝した、スペイン代表の決勝の先発メンバー11人中、半数以上の6人がバルサの選手であった。スペイン代表は、「世界最高」のバルサの例に倣うことで悲願を達成したと言っても過言ではあるまい。

やすだ けいし（龍谷大学経済学部専任講師・スペイン現代史、イスパニア語学科2000年度卒業）